社会とリカレントを結ぶ

月刊先端教育

INNOVATIVE LEARNING

大特集 「教養」で終わらない、課題解決力

社会人のためのSTEAM教育

12月号
2022

香川県特集

地域×教育イノベーション

香川大学・アイデア創出型の人材育成に向けて

特集 子どもの非認知能力を育むSTEAM教育

特別企画 アフターGIGAの学習環境整備

特集

地域×教育イノベーション
香川県

瀬戸内国際芸術祭が開催されるなど、
豊かな文化や自然に囲まれ、数々の地域資源を有する香川県。
しかし、近年、少子化や若者の県外流出などにより、
地域活力の低下が懸念される状況となっている。
そうした中で香川県は、郷土の自然や歴史、伝統、産業への理解を深め、
子どもたちの夢や志を育む教育を推進。また、民間においても、
起業家教育やデータサイエンス教育、リベラルアーツなどを通して、
自らの良さや可能性を見出すための挑戦が始まっている。
本特集では、香川を舞台にした教育・人材育成プロジェクトを紹介する。

数多くの島々が連なる瀬戸内海。国際芸術祭の舞台にもなっている。

Photo by Kentaro Ohno

CONTENTS

94 郷土を愛し、郷土を支える人材を育てる
香川県教育委員会 教育長　工代祐司

98 数字で見る香川県の教育

100 創発を起こし、地方分散型の社会へ
香川大学長　筧善行

104 女性起業家を育成、共感の輪を広げる
株式会社サンクラッド 代表取締役　馬場加奈子

106 地域のデータサイエンス人材を育成
WiDS SHIKOKU アンバサダー　山本真理乃

108 挑戦が伝播する「熱狂」の場づくり
東かがわ市 官民連携マネージャー／テラロック主宰　寺西康博

110 「境界を越える学び」で人を育てる
濱川学院 学院長　濱川武明

112 日本初、建設職人を育てる学校
一般社団法人 匠の学舎 理事長　白川勝

114 豊かな人間形成へ、原則的学習を追求
学習塾レーゼクライス 塾長／株式会社美多仁 代表取締役　三谷修司

116 近世の香川県教育史 藩校と私塾の展開

文系・理系の壁を越え、「教育」を問い直す

教養とは未知の世界を拓く力、「境界を越える」人を育てる

高松において、リベラルアーツ教育にも力を注ぐ予備校「濱川学院」を展開するほか、「インスピレーションの連鎖を生む」をコンセプトに据えた拠点を開設。さらには、商店街でアートイベントを開催する。それらはすべて、境界を越える人を生み出すための挑戦だ。

濱川 武明　Takeaki Hamakawa

濱川学院　学院長
1974年、香川県高松市生まれ。京都外国語大学英米語学科を卒業。香川県内の予備校講師を経て、2016年9月に境界を越える人材を生み出す教育を実践する予備校「濱川学院」を創設。

教科の枠組みを超えた思考力、リベラルアーツに力を注ぐ

香川県高松市の商店街にある予備校「濱川学院（Hammer Academy）」は小学生から予備校生までが志望校合格を目指して学んでいるが、通常の5教科の授業に加えて、領域を越えた独自の教育にも力を入れている。その1つがリベラルアーツ講座だ。年に数回、全生徒が無料で受講できる特別講座を実施している。

濱川学院の学院長、濱川武明氏は「これからの時代、文系・理系の壁を越えた学びこそが重要になる」と語る。

「日本の文系・理系は、明治期のエリートが海外から法律を学ぶ官僚と、軍事・科学技術を導入する官僚に分かれて、それぞれに専門特化してきたことが由来の1つです。それは日本が近代化するために必要な施策でしたが、今の時代にはそぐわなくなっています」

しかし現実には、いまだに文系・理系の断絶は根深い。

「日本では分野・組織を越境することが奨励されず、言われたことを従順にこなすことが歓迎されます。しかし、それが日本社会の停滞を招いている。私が今の子どもたちに伝えたいのは、社会に流されない、時代に流されない夢を持ってほしい。少なくとも4～5年先、できれば10年先を見据える視座が必要であり、そのためには教科の枠組みを超えた思考力が求められます」

濱川学院のリベラルアーツ講座では、各分野で活躍する専門家が講師を務める。扱うテーマはNFT（代替不可能な証明書付きデジタルデータ）や金融、スポーツにおけるデータ活用など様々であり、実社会の最前線に関わるものが多い。

「好奇心、つまり未知の世界の知識を得るときに生み出される意識こそが、本当の教育であると考えています」

また、濱川学院では国際バカロレア講座も開講している。同講座は英語を学ぶのではなく、英語を手段として教養（リベラルアーツ）を学ぶ。濱川学院が提供している数々の教育プログラムは、単なる情報の記憶ではなく「本質の理解」を目指している。

恩師と出会い、勉強に開眼 学年最下位からトップに

濱川氏は香川県で生まれ育ったが、偏差値一辺倒の管理教育になじめず、高校時代は「不良だった」という。高校3年への進級時、濱川氏の成績は学年最下位。転機となったのは、高松で個人塾を経営していた恩師との出会いだった。

「その先生から知識を体系化して覚えることの大切さを教わりました。例えば、一つの単語には反義語・同義語などのセットがあって、英語では名詞、形容詞、副詞、動詞が全部つながっている。そうやって体系化すると、大学受験のために覚えるべき6000の英単語が数百まで減る。また、英語の受動態について、キリスト教の欧米では神が人間に何かを与える、人間は授けられる存在であると考えられてきたことが背景にある。そうした教養の知識をサラっと言う人でした」

恩師との出会いにより、濱川氏は学びの面白さを知った。さらに恩師と接する中で、上から押さえつけられるのではない、ナナメの関係性の価値を感じた。高校3年の5月、濱川氏は一転して猛勉強を開始する。学年最下位だったのが、夏休み明けには偏差値80で学年トップになったという。

そして濱川氏は、京都外国語大学に進学。大学卒業後は香川県内の予備校講師として20年勤めた後、2016年に濱川学院を設立した。

予備校講師の時代を含めて、濱川氏はこれまで3000名程の生徒を送り出してきた。濱川学院の立ち上げの際には、大学生から社会人までかつての教え子が集まり、内装の設計や教材の作成、会計や広告宣伝まで、各自のスキルを活かしてサポートしてくれた。それは予備校講師の頃から「いかに生きるべきか」を生徒に説いていた濱川氏にとって、自分が実践してきた教育の価値を感じられる経験となった。

濱川学院のエントランス。本に囲まれた自習室になっている。

「インスピレーションの連鎖を生む場所」をコンセプトに掲げる複合施設「BRIC」。

商店街を文教地区にすると宣言、地域に学びのカルチャーを

濱川学院の校舎がある高松市・常磐町商店街は往時の賑わいが失われ、空き店舗も増えていた。濱川氏は濱川学院の設立時、「ここを文教地区にする」と宣言。それは単に教育施設をつくるだけでなく、人が学び育つカルチャーを地域に醸成することを目指した宣言だ。

「成熟社会において、商業機能の充実ではなく、人への投資こそが地域に発展をもたらすと考えています」

Hammer Academyグループは2019年、商店街内に多世代が交流するスタディスペース「BIBLIO（ビブリオ）」をオープンした。

「BIBLIOでは、中学生がテスト勉強している横で大学教授が勉強していたり、その向こうでは主婦が本を読みに来ていて、そうかと思うとビジネスマンが資格試験の勉強をしている。私の思いとしては、『世代を超えて勉強すべき』というよりは、大人も実は勉強している、その姿を子どもたちに見せてほしい。人が育つうえではタテでもヨコでもなく、ナナメの関係性が大切。私の中では人の交流もリカレント教育です」

さらに2021年、BIBLIOのすぐ隣に小規模複合施設「BRIC」を開設した。BRICは「インスピレーションの連鎖を生む場所」をコンセプトに掲げ、コワーキングやイベントスペースの機能を備えている。前述の濱川学院のリベラルアーツ講座はBRICで開催され、地域住民でも参加できる。BRICは地域に学びのカルチャーを発信する拠点なのだ。

濱川氏はBRICで起業家を支援するメンターを務めており、数々のサポートを提供している。実際に会社を立ち上げた若者も出てきた。また、濱川氏自身も今年4月、かつての教え子とともに新会社「MIX UP」を起業した。MIX UPはこの10月、高松市内の3つの商店街で最先端のデジタル技術を活用したアートイベント「Setouchi Art Jack」を開催した。それは街中をミュージアム化し、境界を溶かして多様な価値観を混ぜ合わせる試みだ。

数々のプロジェクトを展開している濱川氏だが、すべては境界を越える人材の育成につながる。その実現に向けて、自らも領域を横断してチャレンジを続けている。■